〔儀禮註疏 十六 少牢饋食禮〕尸又食、〇中略註、又復也、或言食、或言飯、食大名、小數曰飯、〇中略疏、〈中略〉釋曰、云食大名者、以其論語文、多言食、故云食大名也、云小數曰飯者、此少牢特言三飯、五飯、九飯之等、據一口謂之一飯、五口謂之五飯等、據小數而言、故云小數曰飯也、

〔東雅 十二 飲食〕飯イヒ　太古の時、神名飯依毗古といふあり、保食神、口より飯を出せしなどいふ事あり、されど飯をイヒといひし義は不詳、〈中略〉或人の説に、飯をイヒといふ、イは發語の詞也、古語にヨシといふ事をヒといふ、イヒとは、其美食なる事をいひしといふ也、

〔倭訓栞 前編 伊 三〕いひ　飯をいふ、古へもはらいふは强飯也、飱飯は湯漬いひなり

〔倭訓栞 前編 米 三十二〕めし。　今飯をいふは、みをしをつゞめたる詞也、或はめし物の略といへり、祝詞式に聞食と書り、此ときは食去聲寘韻に入れり、蝦夷には、飯くふをゑもれといふ、万葉集に食國をめし賜んといふも同じ、出羽にやはらといふ、

〔類聚名物考 飲食 一〕案るに、たゞ飯とのみいふは總名にして、强飯もひめも共におなじかるべし、〇中略和名抄にたゞ飯とのみ云名目はなし、强飯以下何のいひとはいへるにて、總名なることと知るべし、

〔和漢三才圖會 百五 造釀〕飯 音煩　餅 同、和名以比、俗云女之、〇中略

本綱、炊諸穀皆可爲飯、大抵皆取粳秈粟米者爾、禮記云、飯左居、羹右居、

按凡炊飯新精米一斗淨淅用水一斗炊之、如古米者、水增二升佳、或不拘多少、釜中水面泛掌後節上者爲準、尋常日用之飯也、

〔瓦礫雜考 二〕飯

漢土の飯は、こゝにて今たく飯と異りて、夜より米を水にひたし置て、明の朝甑にて蒸もの也、ここにて古の飯は强いひなりといへば、これまた漢土の如く蒸飯なるべし、〇中略またこれをめしといふことは、御をしの約り也といへる說もあれど、こはたゞ聞しめすなどのめしにて、めし物